

学長インタビュー

奈良女子大学学長
いまおか はるき
今岡 春樹 学長

女性リーダーを 育成するための拠点として

国立大学法人奈良女子大学は明治四十一年（一九〇八）開学の奈良女子高等師範学校を創基とし、現在、文学部、理学部、生活環境学部、三学部と大学院人間文化研究科（博士前期課程および博士後期課程）を擁し、「全国から集まり全国に帰りリーダーとして活躍する女性人材を育成する大学」として発展しています。

今回のインタビューでは、国立の女子大学として大学改革に邁進している奈良女子大学のグランドデザインと特色ある教育・研究を中心にお話を伺いました。

ダイバーシティが求められる時代の国立の女子大学

——奈良女子大学のグランドデザインあるいは女子大学としての役割についてお伺いします。

学長 本学は女子高等師範学校時代から数えて今年でちょうど一〇六年になります。歴史をひも解くと、その後、新制大学になった当時やはり苦労があったことがわかります。本学は一学年四七五人の小さな大学ですが、常に問われてきたのは、女子大学であるということですが。

私自身は女子大学であることは本学の一つ

の特長だと考えています。今、多様性とかダイバーシティが大事であると言われていますが、その意味でも国立大学の中に本学のような大学があることは決して悪いことではありません。大学に女性がほとんど入らなかった時代はもちろんですが、女性が大学に入るようになった時代になっても、また今日においても女子大学は必要であり、女性リーダーを育成するための拠点として、日本国内のみならず、世界に打って出るような大学にしていきたいと思っています。

女性の強みや特徴を生かした人材を育成する

学長 男性と女性には性差というものがありません。たとえば男性は論理的に深く考えていく能力に長けているとか、女性は広く物事を見て、その中で良いものを見つけていく能力に長けているというようなことが言われますが、たとえばリーダーになる時、あるいは学問をする時にも、やはり性差による得手不得手があるだろうということですが。そうした際に、女性の強みや特徴を生かした人材をたくさんつくっていく、あるいは女性の強みの部分を男性社会に向けて発信していくことが重要だと思っています。たとえば、ものづくりの例で言うと、男性がいろいろ原理に基づいたり、効率を求めたり、生産者側の発想に長けているのに対して、女性の場合は「こんなのがあったら便利だね」というような消費者側の発想に長けていると言われます。おもしろいことに、今、売れる商品をつく

けですから、考え方としても正当性があると思います。そのあたりが、私たちが考えている本学のグランドデザインあるいは本学の役割になっていくと言えるでしょう。

学長に就任して一年になりますけれども、

信頼に基づく力強いリーダーシップを発揮してほしい

——奈良女子大学が育成する女性のリーダー像についてお伺いします。

学長 リーダーになるための基本と言いますか、最低条件は、仕事を任せられるということだと思えます。彼女に任せておけば大丈夫という信頼感を得られるだけのスキルを持つこと——これがリーダーの最低条件です。それによって自分自身の幸せに貢献するだけでなく、さらに他人に与えることができ、周

りの人たちのレベルを向上できるのがリーダーだと思います。

私が思っている女性のリーダーというのは、トップダウンではなくて、むしろボトムアップです。草の根の人間関係から「あの人の言うことだったら、ついていこう」「あの人の人なら任せられるよね」という力強いチームを作り上げて、最終的にはみんながそれぞれの形で幸せを手に入れられるようにしていく——これが女性のリーダーのあり方ではないかと思っています。ワーク・ライフ・バランスということがよく言われますけれども、まさに家庭を大切にするリーダーになってもいいと思います。

女子大学の強みは、何ことも女性がリーダーシップをとらなければならないということですが、男女共学だと、男性がリーダーになって、女性がサポートに回りがちですが、本学では、たとえば荷物を運ぶのも女性です。

社会には男性もいるわけですから、ギャップはありませんかということをよく言われますが、卒業生の話だと、そこは慣れればまっ



今岡 春樹 学長

- 昭和27年1月3日 生まれ
- 昭和53年10月 国家公務員上級(甲種)試験(情報工学)合格
- 54年3月 東京工業大学工学部制御工学科卒業
- 56年3月 同 大学院総合理工学研究科修士課程修了
- 平成元年12月 工学博士
- 昭和56年4月 工業技術院繊維高分子材料研究所通商産業技官
- 63年10月 同 応用技術部材料設計研究室主任研究官
- 平成2年4月 奈良女子大学家政学部助教授
- 5年10月 同 生活環境学部助教授
- 10年3月 長期在外研究員(連合王国 プラッドフォード大学)
- 13年4月 奈良女子大学生活環境学部教授
- 19年4月 国立大学法人奈良女子大学教育研究評議会評議員
- 23年4月 同 生活環境学部長
- 24年4月 同 研究院生活環境科学系長
- 25年4月 同 学長

たく問題ないということです。むしろ、リーダーシップのとり方を学んでいたほうが良いようですね。

中高生に学問のおもしろさを伝えられる教員が必要

——奈良女子大学は女子高等師範学校にはじまるわけですが、教員養成の取り組みについてお伺いします。

学長 本学の教員養成は一つの岐路にあると思っています。これからの教員は高校生あ

るいは中学生に本物の学問のおもしろさを伝えることができないようではだめだと思うんです。もちろん、大学の教員が出前授業を行っても良いのですが、高等学校や中学校の教員の中にも、そのようなスキルを持った人材が必要だと思っています。そのためには、一つの専門を相当深く知っている教員を輩出しなければなりません。女子高等師範学校はそのような教員を輩出してききましたから、そういう教員をつくっていききたいというのは、希望としてはありますね。

少人数でとことん議論することが真の教養につながる

——専門性に加えて、幅広い教養が求められると思いますが、いかがですか。

それとおりのです。教養というのは、人と話す能力や人を説得する能力にあらわれますが、要するにどれだけ深く考えることができるかということなんです。そのためには、大教室で教えるのではなく、やはりゼミが有効です。少人数でお互いに話し合っていて、いろいろな問題をとことんまで考えてみるのが真の教養につながるわけです。

なぜ教養が大事なのかというと、これがあれば、世界中、どこへ行っても大丈夫だからです。海外では語学力も必要ですが、それ以上に、自分の考えがどこにあり、自分の主張のポイントがどこにあり、相手が何を主張しているのかをきちんと理解して相手とうまく

マッチングを取りながらコミュニケーションできることがとても大切になります。本学の附属小学校では「奈良の学習法」という言葉で知られている極めてユニークな教育をしています。今言ったようなことにつながる教育を既に小学校で行っているのです。附属小学校での長年の実践から学んで、大学レベルあるいは大学院レベルの教育に翻訳しようと思っています。

グローバルに活躍できる人材の育成についてお伺いします。

古都奈良にある特色を生かす

——奈良女子大学の特色ある教育と研究についてお伺いします。

色ある研究を進めています。奈良女に行けばおもしろい考古学を研究できるというようにしていきたいと思っています。

消費者の視点からの「生活工学」

学長 生活環境学部のキーワードは応用です。役に立つということはとても重要です。ものがどう役に立つかということを分析する

とともに、消費者側から提案をしても積極的に参加していく。われわれは消費者側からの工学を「生活工学」と呼んでいるんですけども、女性であることの強みや特徴を生かせる学問であり、今、企業からも求められています。消費者の立場や生活者の立場からのづくりに意見したり、さらにはものづくりの提案をするところまでやっていくべきだと思っています。

留学生には日本の良さを学んでほしい

——国際交流・国際貢献の取り組みについてお伺いします。

学長 国際貢献については、アフガニスタンの女子教育支援を五女子大学（お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、日本女子大学と本学）と一緒にやっています。今、お茶の水女子大学とジェンダーに関して大学間で連携した取り組みを進めています。

国際交流については、欧米の大学と協定を結んで交換留学の取り組みを進めているところですが、アジアの大学とも進めていく必要があると考えています。たとえば、ベトナムやインドネシアなどへ日本の企業が進出して

いますから、日本語を話せて、日本の大学を卒業した人材は非常に重宝されます。ただ、日本とは文化が異なっていますので、多文化共生の取り組みを進めていこうと思っています。

学生の海外経験を後押しする

——日本の学生の海外派遣についてはいかがですか。

学長 大学としては国際交流基金を用意し

学長 理学部では真理を追究しています。日本には多くの女子大がありますが、理学部を持つのは、お茶の水女子大学と日本女子大学と本学の三大学だけです。本学は小さいながらも大きな貢献をしています。たとえば、国立大学の修士課程において物理学・化学・生物学を専攻する修了生を調べると、本学出身者が一〇%を占めています。今、注目されている「リケジョ」（＝理系女子）を数多く育ててきていますし、これをこれからも伸ばしていきたい。

“奈良女に行けばおもしろい研究ができる”

学長 それから、文学部は“ことば”を中心に扱っていますけれども、歴史や言語の問題をはじめ、人間および人間を取り巻く世界にかかわる諸問題について学際的・総合的な研究を進めています。人間性への深い洞察が必要になりますし、自由な発想と柔軟な思考力が勝負だと思います。やはり古都奈良にあるという特徴を生かしていく。たとえば、本学の考古学は理系と文系がジョイントした特

て学生をサポートしています。基金には佐保会という本学の同窓会組織の協力をいただいています。後輩のために先輩が援助してくれています。

——海外に行くためには費用がかかりますからね。

学長 そうなんです。そこで、大学としても、海外の大学とお互いに学生の交換で学費をゼロにするような協定を結んで、あとは少額の援助があれば、学生が自分で費用を負担しなくても留学できるような取り組みを進めています。

毎年一〇人程度ですが、イギリス、ドイツ、フランス、オーストリア、アメリカ、中国、台湾……それぞれの協定校に学生が短期留学をしています。帰国後に学生からの報告を聞くのが楽しみなのですが、海外に行く日本を見直す良い機会になるんですね。海外を見始めて日本がわかる。学生時代のそういう経験は将来必ずプラスになりますので、大学として積極的に推し進めていきたいと思っています。

同窓会の強力なサポート

——お話に出た同窓会・佐保会についてお伺いします。

学長 一般社団法人佐保会は奈良女子高等師範学校および奈良女子大学の同窓会であり、ちょうど一〇〇周年を迎えて、さまざまな行事を行っています。その中で学生をサポート

するための募金活動をしていただいています。本学の行く末を真剣に考えていただいでいて、優秀な学生には賞をいただいたり、さまざま

学問による地域貢献をつねに模索

——地域貢献や産学官連携についてお伺いします。

学長 地元の今西清兵衛商店と本学理学部の教員が一緒になって「奈良の八重桜」というお酒をつくりました。理学部の教員が奈良の県花であるナラノヤエザクラから清酒酵母を分離・培養することに成功して、その酵母を使って醸造された清酒です。

その後も研究を続けて、ピンク色の清酒「奈良の八重桜」クリスタル・チェリー」をつくることに成功しました。この色に醸造するのは難しいんです。人為的に突然変異を起こさせる作業を繰り返して、サクラをイメージさせる赤色酵母を開発しました。ワインみたいな色のお酒でしょう。

——ええ。

学長 地元の酒蔵との連携で、日本で初めてこういうお酒ができたんです。

高齢者の営農を支援

学長 それから、この辺りは柿を中心とする果樹栽培が盛んですが、農家の方の高齢化が進み、農作業がたかたかになってきている

なかたちで本学を強力にサポートしていただいています。

すね。そこで社会学、スポーツ医学、農学、機械工学といった異分野が共同して「らくらく農法」というのを開発しました。収穫した柿を運ぶための一種のトラクターのような運搬車を地元のメーカーとタイアップして開発したり、さまざまな仕掛けを用意したところ、腰が痛いので営農をやめようかと言っていた高齢の方が、あと十年はやれるかなとずっと続けてくれています。奈良の地は古都ですけど、すぐ周辺は田舎なんですね。田舎と都会は両方ないとダメなんです。田舎が弱ると、都会も弱りますから、田舎をどうサポートしていくかを考えて進めています。

大学の地域貢献にはさまざまななかたちがありますが、やはり大学の教員が学者という立場で学問そのものによって貢献していくことが理想だと思います。そういうかたちで何か貢献できることがないだろうかということを常に考えています。

若い教員を徹底的に鍛える

——女性研究者支援の取り組みについてお伺いします。

スペースのほかにソファやベビーベッドもありますのでお子さんを連れていても安心です。大学としてさまざまな体制を用意しながら、トータルに対応するようにしています。

“攻め”の広報へ

——広報活動についてお伺いします。

学長 広報活動については担当の理事がこれからまさに戦略的に展開しようという段階です。これまではどちらかと言えば受け身だったのですが、これからは基本的には攻めの姿勢で発信していきます。単に発信するだけでなく、きちんと受け手に伝わったかどうかを重視していく。それから、たとえば本学で進めている生活工学については、ものとして目に見える形で提示していかないとなかなか伝

メンタルの問題は丁寧なケアをしていくしかないと思います。やはり大事に至る前に相談をもらうという体制をいかにつくっていくかということだと思います。

わからないと思いますので、おもしろいものができるなら常に誰にでも見られるようにしていきたいと考えています。

——優秀な学生を集める方策についてはいかがですか。

学長 これもやはり受け身の姿勢ではなくて、本学の魅力を発信していくことが重要だと思っています。おもしろそうだと思うって来ていただく。まだまだ伸びしろがあると思っています。

コミュニケーションを大切にしながら運営する

——メンタルヘルスの相談体制についてお伺いします。

学長 健康については保健管理センターに医師がいますし、心理的な悩みについては学生相談室で対応しています。また、障害学生支援室ではハンディを持った学生のためのさまざまな支援をしています。

それから、母性支援相談室というものを設けていて、専門カウンセラーが、学生、教職員の相談にのってくれます。カウンセリング

——大学のガバナンスと学長のリーダーシップについてお伺いします。

学長 本学のような小さな大学では、相当な部分はすでに学長がコントロールできるようになっていきます。ヒト、モノ、カネ、すべて学長がコントロールできると言ってもよいくらいです。

よく言われるのは、学部の方が強いのではないかということですが、いくら権限があっ

たとしても、上から言うのではなくて、お互いにコミュニケーションをとっていくことが重要です。やはり相互に納得した上でなければ、物事はうまくいきません。説得するところは説得し、あとは学長の責任でやらせていただくしかないと思っています。シンプルですけれど、正攻法ですね。

正攻法で十分やっていけるのではないかと考えています。